

2007年アンデスの記録

長 坂 心 (富山大学山岳部OB)

2007年7月17日、ペルーアンデス・ブランカ山群の麓、ワラスに降り立つ。2年前、この地を訪れた時、あまりの素晴らしさに「いつかまた来るんだろうなあ。」と思ったが、やっぱり来てしまった。前回の記憶が蘇るのと同時に、なぜか感傷的な気分になる。いつもそうだ。最高に楽しかった思い出は過去のものとなり、寂しさすら覚える。あの無条件の喜びを味わうために再びやってきたのだ。

パートナーは富山大学山岳部の大森君、目指すはチャクララフという山。東峰と西峰からなる屏風のような山で、アンデス巒が見事に発達した、美しい南壁は登攀意欲をそそる。2年前に見て「これはすごい！」と強烈に憧れを抱いた山である。ルートは東峰山頂へダイレクトに突き上げる、ジャジェール・ルート。僕達が生まれる以前に、フランスのニコラ・ジャジェールによって単独で登られたルートだ。今さら20年以上前に初登されたルートを登って何の価値があるのか、なんて思われるかもしれない。だけど、自分が実際に見てかっこいいと思った山であるチャクララフに、過去の偉大なクライマーの軌跡を追えるのである。こんなに素晴らしい事はないだろう。

今回、取れた休暇は2週間、日本からリマを経て、ワラスまで2日、帰りも2日必要で、現地滞在期間は10日間だ。これも職場の協力があっての有り難い10日間である。それを有効に使うにはペルーアンデスが一番だろう。ペルーアンデス

のブランカ山群は懐が浅く、高所にも生活道路が整備されているので、滞在している町から乗り合いバスやタクシーを使って4,000m台のベースキャンプまで1日で行けてしまう。日本で週末に1泊2日の登山に出掛けるような感覚で、気軽に山に入ることができる地域なのだ。ブランカ山群は世界遺産のワスカラン国立公園をはじめ、見所が満載で観光・登山の両方でメジャーなエリアとなり、世界中から登山者を迎える。おまけに物価も安く、面倒な登山手続きも無い。準備さえ整えば、短い期間で十分に楽しめる。

そうと決まれば日本でやらなければならない事も、自然と決まってくる。僕達のように現地に着いてすぐ登山活動を始めようような場合は、出発前の高所順応が成否を分ける。僕の場合、山行の2ヶ月前から平日は週2回ほど低酸素室に泊まる。恵まれたことに僕の住む富山県には文部科学省の登山研修所があり、その中にある低酸素室を利用させていただく。初めは3,000mくらいの酸素濃度に設定し、回数を重ねるごとに酸素濃度を低くして、最終的には5,000mほどの酸素濃度で一晩を過ごす。体が低酸素状態に慣れてくる頃に出発する計算だ。低酸素室を利用する日は、仕事が終わると、その足で研修所に向かい一晩泊まり、翌朝はそのまま出勤する。それに加え、週末は富士山に通い、身体に負荷をかけての順応を行う。もちろん貴重な週末なので、魅力的な山行の誘いがあれば富士山はキャンセルしてそちらに行ってしまう。他の平日は職場までのランニングとジムで

5. 海外登山記録

のエアロバイクを日課にする。登攀センスの無い僕が体力で劣っていたら話にならないので、日頃からトレーニングは欠かせない。僕の場合、登頂への自信はトレーニング量に比例して高まる。

ワラス到着翌日18日は身体を動かしに裏山までハイキングに出掛ける。標高は富士山と同じくらいだ。日本での順応を試すように早いペースで歩く。やはり身体の動きは鈍く、すぐに疲れる。町に帰ると明日からの食料や燃料の買出しと装備のパッキング。ワラスの町はそこ自体がとても魅力的で楽しい。活気があり、明るく、治安も良い。ここで出会う多くのバックパッカーに聞いても、居心地がいいと口を揃えて言う。観光だけでも十分に面白い町だ。僕達にとって山での最大の懸案は天気である。残念ながら、今年はラニーニャの影響で天候が悪い。ワラスに到着して以来、町から望む山々は山頂付近が常に雲に覆われている。こればかりはどうしようもない。

19日からは順応のためにチャクララフの隣にあるピスコという山へ向かった。案の定、山に入ると毎日夕方から天気が崩れ、夜から朝にかけては小雨。日中もほとんど曇り空という嫌な悪天の周期になっていた。気持ちまで暗くなってくるが、もちろんチャクララフにアタックするその日まで、そう簡単に意欲が萎えることは無い。悪天の中、快調に高所順応を進める。20日に長坂、21日に大森がピスコ山頂を往復。2人とも多少の頭痛はあったが良いペースで登れた。山頂はガスに包まれ何も

見えなかった。それだけに、本来すぐそこに見えるはずのチャクララフに思いは募る。

当初の予定では、そのままチャクララフのアタック体勢に入る予定だったが、天気が悪かったこともあり、1日ワラスに戻り、ゆっくり休んでから再度アタックすることになった。ベースキャンプであるラグーナ69という湖の畔に荷物をデポして、一時ワラスに戻る。ベースキャンプからワラスへの帰路ではみぞれ混じりの雪が降り、再びベースキャンプに入ることを諦めさせるように、僕達の身体を濡らした。1日ワラスで身体を休め、安い食堂でたらふくご飯を食べる。この日ワラスで珍しく大雨になり、山は雪が降っているんじゃないかと不安になる。

23日ベースキャンプに戻る。天気も回復してきた。ロバや牛が放たれる草原の上にチャクララフが見守るように顔を出した。湖から見上げるチャクララフは今まで風景の一部として目にしてきたが、今は登攀の対象として僕の前にいる。登攀に対する心配はあるが、双眼鏡でルートを追う自分の興奮を抑えられない。



24日、チャクララフ南壁基部5,200mにハイキャンプを設ける。クレバス帯を右へ左へ迂回しながら憧れの山に近づいていく。やはり前々日の雪で新たに15cmほど新雪が積もっている。目の前にのしかかるように聳え立つジャジェール・ルートを見上げ、自動的にモチベーションは高まる。神聖な空気に包まれた山の中でも、テント内の僕達は相変わらず下らない話に花を咲かせて、ラーメンをすする。天気よ、しばらくの間だけでいいから持ち直してくれ。

25日3時テントを出発。いよいよアタックだ。首尾よく1日で山頂を踏み、明るいうちにテントに戻ってきたい。2人とも気合は十分。月明かりが山頂へ突き上げるルンゼ内を明るく照らし出す。いい天気だ。

目指す東峰の標高は6,001m。下部は50~60度の雪氷壁。ルンゼ内は程よく締まった雪で快適だ。



斜度はほとんど一定で、手足はいつも通りのリズムを刻み、闇の中をノーロープでぐんぐん登高していく。大森君が先行し、そのヘッドランプの明かりに導かれるよう、後に続く。暗くて下が見えないから恐怖心はないが、慎重に登るよう自分に言い聞かせる。単調な登りで時間を忘れていたが、けっこう上まで来た。登るにつれ傾斜は徐々に増し、ルンゼが狭まり右に屈曲する地点で70度程の氷壁が待ち構える。この頃になると、夜も明け始め、周りの山塊に朝日が当たり、オレンジ色の世界が広がった。南壁といっても南半球だから日は当たらない。冷え込みは厳しいが高揚感が勝り寒くはない。氷壁基部からはロープを繋ぎ合い登って行く。氷の状態は良く、快適な登攀で気持ちいい。お互い写真を撮りながら、ポーズのリクエストに応じる余裕もあった。2ピッチで氷壁を越えると、傾斜は落ちて雪壁のトラバースとなる。しかし、雪の状態が不安定になり、岩の上にクラストした雪がのっている。さらさらの雪にもがく様にアックスを決め、所々で現れる氷にプロテクションを求めて、ロープを伸ばす。途中で2つの襷を乗り越え、右上していくと、垂直の氷壁下のルンゼに入っていく。ここからがジャジェール・ルートの核心である。垂直の部分は短く、たいしたことはないのだが、スカスカの氷だ。中間部はアックスの引っ掛けで登るため、凍りついたリュージュを外したり付けたりするのに難儀し、さらにアイススクリーウの効きそうな氷を求めて右往左往していると手がパンパンになり、ついに1度テンションしてしまう。自分の実力不足である。大森君にみっともない姿を見せてしまった。上部は雪のルンゼから氷の壁に変わり、美しいアンデス襷の壁へと続く。大森君が無難にこなし、まるで迷路の様な襷の入口に立つ。

5. 海外登山記録

ここまで来ると、山頂はすぐそこに見える。山頂からは大きなセラックが張り出し、その下はアンデス巒が密に列を成している。ここまで休みなしに上がってきた。体もよく動き、的確に前へ進んできた。休憩も兼ねて、山頂へのルートをじっくり観察する。正直よく分からない。どの巒の中を進めばいいのか、正面のセラックをどう回避すればいいのか。ハズレだったら、下りて登り返す覚悟で「まあ、とりあえず行ってみよう。」と楽観的に直上する。この急峻な壁にもなぜか新雪が積もっている。それを叩き落とすと、下から堅い氷の層が出てくる。アックス、アイゼンが気持ちよく効き、高度感を楽しみながら1ピッチ延ばすとセラック下に到達した。この上が山頂だ。幸運なことにセラックの下には稜線に向けて右上するバンドがある。これで山頂に立てるという確信を持てた。興奮気味に大森君へコールを掛け、2人バンドに立つ。このバンドで初めてアックスに頼ることなく、両足で立てた。ここまで斜面を蹴り続けた足を休めたいところだが、しばらく頑張ってもらおう。あとは目の前の山頂まで稜線を詰めるだけだ。もちろんセラックの上に行くので、細心の注意を払おうとお互いに気を引き締めるが、自然と笑みが漏れる。大森君が稜線に消えていく。稜線上は雪が多いようで、ロープの流れはゆっくりだが、着実に伸びていく。ロープ半分で動きが止まった。しばらくして余ったロープが引き上げられる。山頂に立った大森君の確保で自分も駆け上がった。

「すごい、チャクララフ登っちゃった！」

頂上からの稜線をたどると向こうに西峰のピークが見える。カッコいい。北側はガスが懸かり何も見えないが、ベースキャンプのある南側はよく見えている。心身共に浮遊感に満たされ、しばし、

現実から遠のく感覚に浸る。チャクララの山頂は、狭く両面とも切り立っているのも、そんな状態でも緊張を保たねばならない。

「そろそろ降りますか。」2人は暗黙のタイミングで下降の準備を始める。山頂の新雪を踏み固めて、スノーバーを蹴り込む。最初から不安定な懸垂下降で緊張する。ゆっくり衝撃を掛けないようにロープをたぐり出す。先ほどのバンドからは安定した氷でアバラコフを作り下降する。さっき登ったばかりのルートなのに、ずっと以前に見たような感じがする。早く安全圏にたどり着きたいと思う自分と、もう少しこの場所に居たいという自分が混在している。そんな中、体は着々と下降を繰り返す。早く慎重に。

この美しい壁にスリングを残置していくのは少々心苦しいが、しかたがない。自分達のエゴを50m間隔で残していく。ずいぶん長い時間が掛かったように感じたのは、上に向かう高揚感が無くなったからだろう。16時過ぎ、取り付きに戻った。上部は曇っているが視界は良い、天気も味方してくれた。屈強なクライマーなら粛々とテントに戻るのだろうが、軟弱な僕達は安全圏に着いた開放感からお祭り騒ぎだ。お馬鹿なポーズで写真を撮り、お互いを褒めたたえる。

ロープをザックに押し込み、何度も南壁を振り返りながらテントに戻る。南壁は僕達の登攀終了を見届けるようにガスの中に消えていった。テントに帰り、ザックを下ろすと達成感が少しずつ押し寄せる。一方で次の獲物を狙うかのように視線は周りの山を観察している。寒い中、さっさとテントに入ってお茶でも飲めば良いのに2人して山々を眺めた。ワンドイ、ワスカラン、チョピカルキ、どれも魅力的だ。夕食は豪華にと言いたいところだが、余ったラーメンとマッシュポテトし

かないので、量を食べて腹を満たす。明日は町の食堂で鶏の丸焼きを食べてやる。

翌日ワラスに帰ると、すぐ現実に引き戻される。帰国準備をしなければならない。リマ行きのバスを予約し、荷物をまとめる。歓喜の中で幕を閉じた山行は過去のものとなり、今は寂しさが胸を掻きむしる。きっとまた来るんだろうな。

今回の山行では、短期間に目標の山を完登できた。登山にあてる時間がたっぷりあれば、それに越したことは無いが、自分の生活の中でやり繰り返しながら、計画を立て、準備するのも登山の楽しみの一つだと思う。僕自身は山の計画を立てているときや、調べ物をしているときは、その山域を想像するだけで興奮してしまう。これからも自分のレベルより少し高い目標を持って、ちよつとずつでも山を続けられたら幸せだなと思う。

ペルー・ブランカ山群の登山情報

南米のアンデス山脈の中でもブランカ山群は最も魅力あるエリアの1つだ。

日本からは遠い国であるが、山麓の町に行ってみれば、目の前に多彩な山々が点在している。そのどれもが町から交通機関を使って1~2日でベースキャンプに入ることができる。登山許可など煩わしい手続きも無い。自分が登りたいと思いついた時に、短期間で手軽に登山活動ができるのだ。

・シーズン

登山に適しているのは6月から8月である。以前は8月の記録も多かったが、最近では氷河の後退、山の着氷雪の減少が著しく、6,7月に登山期間を設ける登山者が多い。8月も終わりにになると

氷河のクレバスが広がり、困難になる。また、エルニーニョやラニーニャの年には、悪天になることが多い。

・日本から登山基地ワラスへ

ペルーの首都リマへの直行便はない。アメリカ・カナダ経由が一般的で、北米系エアライン数社がリマ行きを運行している。運賃は時期によって大きく変動するが、10~20万円。7月の中旬からお盆休みに向けて価格は上がっていく。

リマ~ワラス間は約400km。長距離バスに乗って8時間程で着く。バス会社やバスのグレードによって運賃は変わるが1,000~2,000円で立派なバスに乗れる。

・ワラスの町

小さな町だが中心部には店が軒を連ね、活気があり、治安も良い。英語を話せる人は少ない。登山用品店や登山エージェントの店員は英語を話せる人が多い。

町の標高が3,000mあるので、到着日は注意して様子を見るべき。郊外に出て丘を登れば、すぐに4,000m近くまで順応ができる。

・ホテル

ワラスの町には、たくさんのホテルがあり、探すのに苦勞はしないだろう。心配なら予約をしても良いが、宿泊当日に交渉しても問題ない。シャワー・トイレ付きで500円の安ホテルから10,000円もするような高級ホテルまで好きに選べる。登山者の良く利用するホテルでは、登山期間中は荷物を倉庫などで預かってくれる。

5. 海外登山記録

・登山エイジェント

ワラスに訪れる登山客は多く、登山客相手に登山をアレンジする代理店も数多く存在する。車やガイドの手配、装備の貸し出しなど登山全般のマネージメントをしてくれる。お金は掛かるが煩雑な交渉を引き受けてくれるので、初めてで時間の無い人などは利用していた。

・登山口への交通

ワラスからタクシーや乗り合いバスを使って登山口を目指す。両者とも早朝から深夜まで流しているため、当日でも簡単に乗車できる。タクシーは前もって予約しておき、当日にホテルに迎えに来てもらうこともできる。乗り合いバスは運賃が決まっているが、タクシーは交渉制なので、各運転手によって価格の差がある。僕の感覚では10分100円くらいが相場かなと思った。

・装備

僕達は全てを日本から持参した。現在、アメリカ大陸行き航空機にはエコノミークラスでも32kgの荷物を2つまで持ち込めるので、十分に全装備を日本から持っていける。今回は一人当たり約40kgだった。

特別な装備を買い足したりはせず、装備は日本の冬山で使用しているものをそのまま使った。冷え込んでも極端に寒いことはないし、日が当たって無風なら暖かいのは、日本と同じだと感じた。

もちろん、燃料だけは現地調達である。ガソリンストーブには現地の金物屋に売っている「ベンジーナ」という燃料を使用する。質も良く、全く問題なく使える。ガスカートリッジも登山用品店で売っている。

登山用品店にはレンタル装備や中古品を売っているため、現地で調達することもできるが質や在庫の保証は無い。

地図やガイドブックは登山用品店やガイド協会の事務所に揃っている。

・食料

僕達は日本から一切食料を持ってこなかった。ワラスには市場やスーパーがあり、ほぼ日本と同じようなものが揃う。生鮮食品はもちろん、乾麺、粉末スープ、粉末ジュース、ドライフルーツ、ナッツ、各種お菓子と満足な品揃えである。現地に馴染みのない加工食品は高いが、ほとんどの食品が日本と比べて格段に安い。

・ガイド、ポーター

僕達は使ったことは無いが、主要な登山口には荷物をベースキャンプまで運んでくれるロバがいる。価格はロバ使いが10ドル、ロバ1頭につき30～40kgで5ドル。他にも登山ガイド、ポーター、コックなども雇うことができる。

・国立公園入山料

一人当たり1週間で2,000円程度を支払う。はじめて通るチェックポストで料金を払いチケットを発行してもらう。以降は入山するたびに、チェックポストでチケットを見せる。